

教 育 委 員 会 会 議 次 第

平成 2 6 年 1 0 月 2 4 日 (金) 15:00

教 育 委 員 会 会 議 室

1 開 会

2 案 件

(1) その他報告

その他報告① 「平成 2 5 年度北九州市立図書館の評価について」
(中央図書館庶務課長)

その他報告② 「給食費改定後の給食の変化について」
(学校保健課長)

その他報告③ 「平成 2 6 年度全国学力・学習状況調査結果の概況について」
(指導第一課長)

3 閉 会

教 育 委 員 会 （ 定 例 会 ）

- 1 開催年月日 平成26年10月24日（金）
- 2 開催時間 15:02～16:01
- 3 開催場所 小倉北区役所庁舎東棟6階
- 4 出席委員 古城和子（委員長） 吉田ゆかり シャルマ直美 伊藤一義 彌登 章
垣迫裕俊（教育長）
- 5 事務局職員 教育次長 岩淵 英司
総務部長 小澤 周三
学務部長 花本 潤一
指導部長 渡邊 義隆
教職員研修・企画担当部長 大庭 正美
生涯学習部長 宇佐美 健次
人権教育担当部長 大竹 順司
総務課長 平野 義人
企画課長 松成 幹夫
施設課長 佐村 良夫
指導企画課長 今村 剛志
指導第一課長 弥永 和利
指導第二課長 平池 秀幹
特別支援教育課長 入尾 忠之
教職員課長 太田 清治
学事課長 吉竹 直人
学校保健課長 安藤 光春
生涯学習課長 梅下 勝己
教育課程担当課長 河村 信孝
教育振興担当課長 山本 浩三
中央図書館庶務課長 嶋田 直紀
中央図書館奉仕課長 深町 康幸
- 6 書 記 総務課庶務係長 田内 淳也
総 務 課 鈴木 忠之
- 7 会議の次第 別紙のとおり

教育委員会会議録（平成26年10月24日）

1 開 会

15：02 古城委員長が開会を宣言

2 会議録署名委員の指名

古城委員長が会議録署名委員に、吉田委員とシャルマ委員を指名。

3 案 件

(1) 公開案件

その他報告① 「平成25年度北九州市立図書館の評価について」

中央図書館庶務課長が報告。

〔報告要旨〕 以下の項目について報告。

- ・評価の趣旨
- ・評価実施の背景
- ・実施方法
- ・スケジュール

古城委員長／4ページの内部評価が「C」となっている、「5 ネットワーク（連携）統括機能の充実」の項目の「学校ネットワークを活用し」で指しているのは、小中学校のネットワークのことか。

中央図書館庶務課長／今言われたとおり、小中学校のネットワークシステムのことである。この取り組みは、市立図書館以外の全ての図書館の情報システム機能を統括・充実を進めるというものであるが、実際のところ、小中学校の学校ネットワークシステムを利用して、校務支援を行ったということで、C評価になっている。

古城委員長／どのようにすれば、BやAになるのか。

中央図書館庶務課長／市内小中学校以外にも、大学の図書館などがあるが、それらのネットワークともつながることを目標としている。しかし、現状のところ困難である。

古城委員長／今説明いただいたことからすれば、同ページの「1 大学図書館との連携」と密接に関連するものであると思う。そうであるならば、ネットワークが不十分であるのに、「1 大学図書館との連携」がBで、「5 ネットワーク（連携）統括機能の充実」がCという点に齟齬はないのか。

中央図書館庶務課長／5のところは、情報ネットワークシステムに関する項目であり、1については、北九州市立大学と九州国際大学と協定を締結し、閲覧や貸し出しなど、北九州市民、また北九州市内に通勤・通学している方が大学の図書館を利用できるという協定を締結しているかといった、市民サービスの観点に関するものである。

古城委員長／大学図書館との連携を考えると、私大を含め各大学ごとに、その学校が持っている得意な領域の書物があると思う。市民サービスの拡充といった面から、多種

多様な書物が利用できるよう、より多くの大学との連携というのも、今後、検討してもらえればと思う。

吉田委員／7ページに「ヤングアダルト(中高生)機能の充実」におすすめ本紹介のポップ作成・展示とあるが、どこに置くのか。

中央図書館奉仕課長／基本的には、小中学校で作成した場合、学校図書館に置くなどしている。中央図書館には、学校との連携ということで、各学校の図書館活動等の様子を展示するコーナーを2面、壁のほうに設けている。そこに実物を展示するというのを、月に1回、各学校の分を入れ替えながら紹介しているが、その際にもポップを用いている。

吉田委員／ヤングアダルト図書館サポーターと今まで他の図書館サポーターとの違いについて伺う。

中央図書館奉仕課長／ヤングアダルト図書館サポーターというのは、主に中高校生の視点から図書館の利用を促進する応援をしてもらおうというものである。中央図書館で小中学生を対象にした子ども司書養成講座に取り組んでおり、今のところ中学生に行なってもらっているが、今後は高校生にも図書館の利用促進を応援してもらうため、図書館の活動や司書体験をしてもらうなど、施策を考えていきたいと思っている。

シャルマ委員／4ページの「学校等との連携による読書活動の推進」の10において、図書館司書の派遣という項目があるが、北九州市立図書館が、図書館司書の活動をサポートするとか、図書館司書の研修だとか、そのような調整などを行なっているのか。

中央図書館奉仕課長／10番の事業については、学校側あるいは幼稚園のほうの要請に基づいて、図書館の司書や読み聞かせのボランティアを派遣するというものである。図書館司書については、それぞれ各館において司書の研修に取り組んでいる。その他に、中央図書館では読み聞かせボランティアの養成講座を行ったり、ボランティアのネットワークを広げたりといった活動により、ボランティアの需給調整を中央図書館において、25年度から取り組んでいる状況である。

シャルマ委員／学校にいる図書館司書のサポートについては行っていないのか。

中央図書館奉仕課長／基本的には、学校図書館の司書をサポートするというよりは、中央図書館や各館の司書、あるいは市民の方によるボランティアを、学校等の要請に従って読み聞かせなどの派遣をするといった面でのサポートを行っている。

垣迫教育長／4ページの先ほど委員長が言われた市内の各大学との連携の話についてだが、確かに大学には専門書があるので、いろいろな連携ができればいいと思う。しかし、市立大学は別にして、九国大以外のいろいろな私立の大学と、九国大と同じように連携しようとするコスト、手間など課題があると思う。他の私立大学との連携の現状について伺いたい。

中央図書館庶務課長／当初の「これからの図書館のあり方」において59項目を定めているが、その事業内容として、北九州市立大学と九国大学との連携ということで掲げており、その観点からの評価になっている。そのため、他の大学とは連携の手続きをしていないというのが実情である。ただ、他の大学においても、大学の活動として、それぞれ住民の方々に大学図書館を開放し、閲覧なり、貸し出しなりして対応している所も現実的には数大学あるという状況である。

垣迫教育長／九国大にしても、いろいろ負担をかけていると思う。それと同じようなことをもしようとする、各大学、どういう負担なり、コストなりがかかるのか。

中央図書館庶務課長／既に九国大と同じように閲覧、貸し出しをしている所について、同様にコストが掛かるわけではなくできると思うが、していない所もあり、その分については利用状況によると思われる。

垣迫教育長／市民の積極的な大学図書館の利用を行っていないところもあるということか。

中央図書館庶務課長／そういうところもある。

垣迫教育長／そろそろ次の図書館のあり方ということを考える時期に来ており、そういう視点も踏まえて展開するといいいのではないかと思う。

生涯学習部長／現在、大学は、地域貢献をいろいろな形でやっているが、例えば産医大とか九工大は専門書が非常に多いけれども、一般の方を入ると非常に本の管理がしにくいか、大学の学生、院生とかが利用するのに、若干妨げになるのではないかということで、ある程度の制限というものをどうしてもせざるを得ない部分がある。今、教育長がいわれたように、次のあり方を考える際には、おっしゃるとおり、再度こちらで調整していきたいと思う。

報告終了

その他報告② 「給食費改定後の給食の変化について」

学校保健課長が報告。

〔報告要旨〕 以下の項目について報告。

- ・ 献立の変化
- ・ 児童生徒等の反応
- ・ 残食の変化
- ・ 消費税増税の影響
- ・ 政令市の給食費の状況

吉田委員／牛乳を給食と一緒に飲むことについて、新聞をはじめ日本的な感覚とずれているのではないかといったことが以前から言われ続けているが、この点について、話し合いなどは市において行われているか。

学校保健課長／給食の牛乳の取り扱いに関する他都市の状況については、牛乳の代わりにお茶を提供するというのを、12月から新潟県のある市では試行的に行うとのことである。牛乳の取り扱いについては、牛乳に代わるカルシウム摂取源がないことから、なかなか牛乳を廃止するのは難しいと現在考えている。他都市において、中休みの時間に牛乳を飲ませるといった取り組みをしたという事例はあるが、やはり飲み物であるので、給食室に取りに行く際に衛生管理に配慮する必要があり、時間的な面からも、中休みに飲ませるとするのは難しいものがある。

吉田委員／カルシウムに関しては栄養供給が日本人は下回っている。発育途上の子どもたちであるから、尚更カルシウムをきちんと摂ってほしい。しかし、学校で取らなかったら家で取るということを徹底するのは難しい状況であることから、牛乳を継続するのは賛成であるが、食べ合わせという面から工夫ができればと思う。

報告終了

その他報告③ 「平成26年度 学校学力・学習状況調査結果の概況について」

指導第一課長が報告。

〔報告要旨〕 以下の項目について報告。

- ・調査結果の概況
- ・学力向上の取組み

古城委員長／「平成26年度 学校学力・学習状況調査結果の概況」の主な要望のひとつに、「学力向上策については、目標をもって、期限を示して取り組んでほしい」とあるが、報告書の原案では、短期・中期・長期の形での取組みを時系列で挙げていくことになっていると思う。そのときに具体的な目標や数値目標など、現在イメージはあるのか。

教育課程担当課長／現在、新しく改定した「未来をひらく教育プラン」の中に、本市の施策でさまざまな指標を示し、まず、全国学力・学習状況調査を全国平均までに到達するというようなこと、対全国比100%というようなことを挙げさせていただいた。それに関連して、学習状況調査の家庭学習時間のあり方であるとか、さまざまな点について、指標を挙げて、目標値を挙げて、鋭意取り組んでいるところである。

古城委員長／計画書には、その点につき記載されるのか。

教育課程担当課長／毎年、報告している報告書の中に、これまではその点について書かれていなかった。計画書には具体的な目標や数値目標を盛り込んでいこうと考えている。

伊藤委員／学力に関して、ある県の教育委員と話す機会があり、学力向上という点において、学力の低い子どもたちに焦点を当てて指導するのと、中間層の子どもたちに焦点を当てて指導するのとでは、中間層の子どもたちに勉強に興味を持たせるといった取組みの方が、全体の学力を上げるという観点からすると効果が上がりやすいから、そちらにまず時間を費やしたという話を聞いた。私は、学力の低い子どもたちを教えた方が、上げ幅が大きいのでそちらの方が上がりやすいのかなと思ったのだが、そうではなく、中間よりも若干下とか、それくらいの子どもの方が、授業で発言の機会を与えたり、興味を持たせるような学習をしたりなど、ちょっとやる気を出してあげれば効果が上がるという話を聞いて、なるほどもしかしたらそうなのかなと思った。今、ひまわり塾をやっていると思うが、主な対象はどの層なのか。

指導企画課長／おっしゃるように児童生徒の実情に応じた指導法というか、対応の仕方があると思う。ひまわり学習塾は、本来は、やはりどちらかというと低学力の子の底上げをしていくということが大きな目標。もう1つは、家庭学習習慣の確立というところがある。2つの目標があるため、学力レベルという面では、学習習慣が身につけばもうひまわり塾に来なくても大丈夫ではないかという子どもも何人かはいる。ですから、そういったところを見極めながら、来年度からは事業を展開していく際に、途中で卒業するだとかいうことも考えていかななくてはならないのかなと考えている。

教育課程担当課長／学力を効果的に上げるためにはどうしたらいいのかという点について、中間層を上げていくというのは、いわゆる全国の平均に近づけるという点において、効果的な手法かもしれない。しかし、私どもは、そこに焦点を当てるとすることは考えていなくて、全体的に見てどこに課題があるのか。以前から協議しているよ

うに、下位層に非常に課題がある学校が多い。そういうところは、まさに中間層が非常に少ないとか、上位層が少ないとか、そういった部分もある。

全国学力・学習状況調査において、国語A、算数A、それぞれの基本的なところが70%くらいしかできていない。そこで今回徹底してやろうとしているのは、国語でいったら読み書きあるいは漢字の読みなど、基本的なところを確実に全部の学校でできるように取り組んでいる。そして、なおかつ、先ほど述べたように、それぞれの学校の中で、どういったところをやるのか、課題かというところをキーワードに取り組んでいる。

そういう意味でひまわり学習塾というのは、学校により進め方や体制に少し違いが生じるが、やはり補助学習的なものは最低必要ではないかと思っている。なおかつ、教員に負担がかからないところという形を目指していく。

古城委員長／短期的には基礎・基本の徹底に取り組み、学校特性といった個別の特性を分析しつつそれに見合った学習の課題への取り組みは、次年度以降の課題とするということか。

教育課程担当課長／今年度はこれ、次年度はこれと区切り、全く今それに取り組まないということではない。個別的なことへの取り組みも行っていく。短期・中期・長期というところという、最終的に、30年度を目標とし全国平均に行くように取り組みを行っていく。

古城委員長／特性を理解し、その特性にあった指導をしていくという、その具体的なあり方を考えるための時間というのが必要ではないかと思う。

垣迫教育長／結果としての点数にこだわって、どこに焦点を当てたら効率的に点が上がるかということも全体のことを考えていけば1つの案だと思う。しかし、私どもとしては、特定の層の底上げに向けた取り組みということではなく、やはり一人一人に着目し、全ての子どもに向けた教育をするというのが基本理念である。

16ページの「学力向上のための今後の取組」を教育の常任委員会に出し、議員に説明したときに、特に2番の「本市独自の学力・学習状況調査」に関して質問が多く、ぜひやってくれという話もあった。

これは来年度以降の予算とも関係があり、詳細はどこまでというのはまだ決まっていないが、今、6年生と中3にしているものを4・5年生、中1・2と連続して行い、一人一人の個人シートを作成し、一連の結果過程を追跡して検討できるようにしたい。中間層の子には中間層らしい指導があるし、相当低学力の子にはそれなりの指導が必要だと思う。最後はそこに行き着かないといけないかなと思う。

現実に、今回分析しているものをもう少し個別に見ると、学校によってはかなり全体が高い学校もある一方で、かなり低学力の子が多いという学校もある。そうとなると、全体の基礎が優先か、応用が優先かということよりも、かなり学校ごとに個別に見ていくという形に現実にはならざるを得ない。全体の流れとしては、ある程度はやはり基礎をやらないといけないというのは間違いのないと思う。そういう中で、個別の取組を指導していきたいと思う。

彌登委員／結果を出さないと、やはりずっとこのことが課題であるとされ続ける。やる以上は、何かこう1歩でも2歩でも前に進んでいくような形を、結果として出していきたいなと感じる。

昨年研修で岡山県や倉敷、高知市に行ったとき、担当の方からいろいろお話を伺ったが、小中の連携をいかにとっていくかということが大事な部分だと言って

いた。小学校から中学校に持ち上がっていくときに、その子どもの詳細な特徴を成績と含めて申し送りをしていくということが大事ではないかということを高知の方から聞いて、なるほどと思った。学力が全てとは思わないが、このような小中の連携をはじめ、取組みを実行し結果を出していけたらと思う。

吉田委員／教育長が教員の負担にならないようにといわれたが、先生がいかに負担に思っているか、思っていないのかというアンケートは採られているのか。成績が伸びているところはそこまで負担に思っていないだろうと思う。成績がすごく上位に上がってきた学校の先生が、どれくらい負担感を持っているのか、持っていないのか。あるいはすごく低迷しているところで、本当に困っているところの先生が、結果が出るたびにいかなる気分であるのか。やはり上げていくことによって、気分というのは変わっていくのだろうと思う。成績だけが全てではないと思うが、小学校において勉強する習慣を身につけるということは、基本の「き」だと思う。小学校の段階で、真面目に取り組むというのは、全てのことに通じていくと思う。そのような観点から学力を向上に取り組んでほしい。

伊藤委員／全国順位や点数といったものは、1年とか2年で上がるわけではないと思う。それを何とか上げようとして、過去問題をするとか、中間層の底上げをするとか、様々な取組みを行い、結果的に5年後、10年後に全国平均やそれ以上となるようにという意識を持ってやっていくことが重要だと思う。

全国順位や点数といったことも確かに大事だが、一時的な結果ばかり追うのではなく、実質的な効果を着実に積み重ねていければと思う。

古城委員長／全国学力・学習状況調査は、北九州の子どもの学力やそれ以外の部分話し合うひとつの契機となればよいと思う。

シャルマ委員／「学力」には思考力、判断力、問題解決力、学ぶ姿勢、持続力、集中力、様々なものが含まれる。定義を広げると、現実には何をするかとなってくるので、取組みの対象を明確にして行うことが重要だと思う。

吉田委員がいわれた教員の負担感についてだが、ある校長先生の話によると、成績があがるとやる気が出ているという話であった。校長先生も職員に意欲を持ってもらうよう集団づくりを気にかけて、その結果職員集団も取組みを通しまとまっていき、その結果が目に見える形で出ると、さらに先生方の雰囲気も良くなっているというような話を伺った。子どもたちと直接接する、先生方の意欲というのは非常に大事だと思う。

二極化が小学校よりも中学校になって極端に増えていることについてだが、どのあたりから勉強嫌いになっていくのか、学習習慣とかが中学校になると難しいのか、どうして分からなくなっていくのか、原因の調査が必要ではないか。

また、読み書き、計算の基本的なところが大事という議論があったが、ドリル学習が効果的だと思う。給食時間にみんなが準備している間集まって計算を繰り返し行う、計算道場といったドリル学習を積極的に取り組んでいる学校などもある。

もう一点。宿題の徹底化という1つにしても、これまで継続していられた課題であり、この課題への取組みはものすごく建設的な工夫が必要だと思う。

教育課程担当課長／まず、先生方の負担感についてだが、全国学力・学習状況調査の結果は、全国平均より上回っているか、下回っているかという表現となっている。ある学校は、下回ってはいるが、随分、全国平均に近づいてきている。にもかかわらず、同じ

下回っている表現というのではモチベーションがなかなか上げにくいという意見も数校の校長先生方から伺っている。

そういった学校を、少しでも私どもにおいても様々な形で協力していきたいと考えている。

また、二極化については、ある中学校区の校長から、各学年の一年毎のデータを小学校から中学校までの数年分をまとめ、一連の継続したデータとして比較検討したいと意見があった。このような中学校区で検討していくという取組みを、今年度から徹底して始めているところである。これを参考例として、各学校に紹介し広げていきたいと考えている。

古城委員長／地区や学校それぞれの特性の分析というのは、素晴らしい取組みであると思う。

このようなデータ分析を積極的に行っていくことは重要だと思う。

彌登委員／保護者と児童生徒の関わりというものも、勉強への取組む姿勢という面で大きく影響すると思う。

報告終了

4 閉会

16:01 古城委員長が閉会を宣言。